



公益社団法人大阪府精神障害者家族会連合会(大家連)

「医療費のアンケート」にご協力を

会長 倉町 公之

大阪府の重度障害者医療費助成制度の改定が、4月に行われました。

精神障害者と難病患者が初めてこの制度の対象となりましたが、その内容は我々が期待したものは、大きく異なるものでした。

○精神障害者からの問題点

この制度改定は、以下の問題点を残しています。

①精神保健福祉手帳1級所持者のみ(手帳所持者の11%)を対象としており、大多数の2級は対象外となっていること

②65歳以上の精神障害者(約1万人)は、これまで老人医療福祉制度による助成を受けていましたが、経過措置として3年間は現行のままですが、その後は助成制度はなくなる

③入院医療費の助成は検討されましたが、大阪府としては現在、長期入院者の地域移行の取組みを重点的に取り組んでいるので、その推進状況を見てから検討するとされていること

④精神障害者の多くは、年金のみの収入で暮らしており、高齢化した親と同居しているものが多い。また、高齢化に伴う医療費の増大にも苦慮している。

○アンケートの目的

そこで、精神障害者の経済生活の実態(住まいの状況、主な収入など)と医療費の実態(医療の種類・頻度、医療に関する負担など)を明らかにし、必要な制度改正を求めて行こうと考えています。

○アンケートの進め方

- ・一定のデータを確保する。(1000件以上)
- ・期間を定めて取り組む。(2018年12月～2019年3月)

アンケートの実施団体としては、大家連のほか、当事者団体の大阪府精神障害者連絡協議会及び大阪府内の28の障害者団体で構成する大阪障害フォーラム(ODF)も一緒に取り組みます。
 ・精神保健福祉士協会(PSW協会)などの他団体へも協力要請を行います。

○スケジュール

今年の12月から準備出来次第スタートし、来年の3月まで実施します。

その結果を整理して、大阪府、大阪府議会、市町村等へ働きかけを行い、2021年の制度見直しへつないで行こうと考えています。

会員の皆さん、当事者の皆さん、読者・協力者の皆さんアンケートへのご協力をよろしく願います。

目次

◆ 「医療費アンケート」にご協力を	1頁
◆ みんなねっと兵庫大会に参加して	2頁
◆ 委員会報告	3頁
◆ 大阪府精神科救急医療運営協議会	
◆ 映画「夜明け前」を見て	4頁
◆ 映画・講演 アンケート結果	
◆ 当事者の思い	5頁
◆ 映画・講演 アンケート結果	
◆ 映画・講演 アンケート結果	5頁
◆ 家族会紹介 家族SST交流会を訪問して	6頁
◆ 連載記事「親亡き後に備える」	7頁
◆ 講座「グループホームづくりの基礎」	
◆ 賛助会費報告・寄付報告・編集後記	8頁

みんなねっと兵庫大会に参加して

わかちあう会K

小春日和の陽射しに揺れる町並みを過ぎ、神戸大橋を渡るとポートピアホテルに到着しました。受付を済ませ神戸の御馳走の詰まったお弁当をいただき、さあ開会式です。折しも県政150周年記念の特認事業に決定した、みんなねっと兵庫大会の始まりです。

基調講演では愛知県立大学准教授 山田浩雅先生が、世界に比べ日本では何故精神疾患の教育が進まないのか、子供、教員、保護者が精神疾患を正しく理解する事の必要性を熱弁されました。

2004年WHOとIEPAによる国際共同宣言『学校に通う15歳のすべての若者が、精神病に対処しうる知識を身に付けるべきである』から14年、我が国日本では、かなりかなり遅れて高校の保健の授業に『精神疾患』が入る事になり2022年から、やっと本格実施される事に。

精神関連では後進国日本の、まさに隔靴搔痒



の教育ですが山田先生から少しでも前に進めていると言うお話が聞きました。先生から家族会として行政への働きかけや、教育の現場で生の声を啓発して欲しいなどのお願ひがありました。

その後みんなねっとの活動報告、厚労省の行政報告が続きました。

特別講演では東京都医学総合研究所病院等連携研究センター・センター長 糸川昌成先生による『心の病とはなにかー物質と物質でないものー』というテーマの講演をいただきました。



近年の生物学的精神医学とは精神症状という『物質でないもの』を相手にした科学であるが、心の病には脳(モノ)と出来事(コト)の要素があり、薬は脳(モノ)に作用するが出来事(コト)には効かず、人が回復するには、モノ(脳)とコト(尊厳・自尊心など)の両方への手当てが必要となるというお話でした。

また、先生の研究されている活性型ビタミンB6(ピリドキサミン)・統合失調症の新しい治療薬の承認が近い将来、実現できる事を願って止みません。

そして終盤に話された、先生をこの世に産み、発病し亡くなるまで精神病院におられたというお母様のエピソード。その事を話せるようになった夏莉郁子先生と中村ユキさんとの出会い。そして『薬は脳を治療し、物語は魂を癒し、腑に落ちる物語が回復をもたらす』という先生からのメッセージは私にとって生涯忘れられない言葉となるでしょう。

その後の懇親会では、お食事と宝塚歌劇OGの但馬久美さんのステージと遠方から来られた家族会の方々のパワーをいただきました。

翌日27日は第3分科会『薬だけに頼らない精神疾患との向き合い方』に参加し普段あまり縁のない見聞きする事もない『薬は毒物であり劇薬』という基本理念がベースの『食事とサプリメントでの代替医療』のお話に耳を傾けました。

その後『白鶴酒造資料館見学とファンタジー号乗船コース』の観光で、美味しい昼食、お酒の試飲、神戸の海を堪能し日程を終え、大阪への帰途につきました。楽しい有意義な2日間でした。



委員会報告

大阪府精神科救急医療運営審議会

相談役 大野素子

当事者と接していつもと違う不調を感じ、最も医療を必要とするとき、そんなときに限って当事者が医療を受け入れてくれにくいこと、また、医療機関が閉じている夜間、休日であることが重なっているときの不安と大混乱は多くの家族共通の悩みといえます。日常いまだなじみのない精神科医療がどんなものかへの不安も重なります。

そんな不幸な状況を何とかしたい、家族としても当事者にとっても「精神科医療につながってよかった」といえる安心できるシステムがあればどんなに救われるかという切実な思いで大阪府精神科救急医療運営審議会に参加させていただいてきました。

審議会は精神科病院から12名、診療所協会、医師会、精神保健福祉士協会、大阪市消防局、大阪府警生活安全課、大阪精神障害者連絡会(当事者団体)、大家連(家族)などからそれぞれ一名で構成されて年一回開催とされています。精神科救急医療システムの現状を理解して、私たちの困っている状況を伝えるには二時間はあつという間に過ぎてしまい、本来なら年複数回の開催が望ましいと思つていきます。しかし、本当に残念なことに次年度より当事者、家族がこのメンバーから外されると

いう連絡を大阪府から受けています。

夕方5時から翌朝9時まで、「おおさか精神科救急ダイヤル」(電話0570-1011-5000 平日夕方5時から翌朝9時 土曜日 休日祭日 朝9時から翌朝9時)に相談してみるか119番に電話して救急依頼をするか救急医療システムとして精神科病院が拠点病院として受け入れてくれることになっていきます。拠点病院は登録の33病院から日替わり輪番で平日夜間は7病院、休日夜間は5あるいは6病院がシフトしています。ただし、満床になり次第終わりです。また、利用者はその病院を選ぶことはできませんので、遠くの病院に行かなくてはならないこともありま



す。搬送を救急車に依頼しても本人が拒否的で難航するときには、本人の医療受診の意思がないからと搬送できないと断られることもあり修羅場になります。

ただ最近救急隊もかなり本人へ受診するよう話す努力をしてくれるようです。救急隊との話が不調に終わるとやむをえず警察の協力をお願いしなくてはならないことになり、110番に電話するとパトカーがサイレンを鳴らしてくることになり近隣に気をつかいます。それでも決着しないと地域警察の生活安全課に搬送をお願いすることになります。生活安全課は普通の乗用車で私服の警察官が複数来て、巧みに説得、搬送を担ってくれます。ある家族は生活安全課に協力を依頼し、本人が興奮することなく昼間入院できる段取りをするのに10日以上かかったと苦しい経験を語ってくれました。

こんな風にあの手この手で泥縄式に入院にこぎつける苦しさ、決まった道筋がないことで当事者からは恨まれることもあり、家族も疲弊していきます。安心して必ずつながらる精神科救急医療システムというにはまだまだ多くの課題を残しています。そして家族はまだ医療保護入院の同意責任から解放されていません。入院しなくても、地域の近いところに24時間365日相談と受診を受け入れてくれる安心できる拠点がほしいという願いは家族共通のものであります。また、アウトリーチといわれる出かけるチームがフルに稼働することや、現状まだ少ないACTといわれるチーム医療や往診してくれるクリニックが広がるのが望まれます。

映画「夜明け前 呉秀三と無名の精神障害者の100年」上演と講演に寄せて

豊中ゆたか会 猪熊

呉秀三は、今から百年前の時代に東京大学医学部精神科の教授として異例の社会的な取り組みを進めた先達者である。彼は精神疾患の人々が「座敷牢」に押し込められていた実情を憂い、その解決のため明治45年(当時45歳)より科の助手らと共に全国を奔走し361の監禁を調査し、それを土台にして1918年(大正8年)に報告書『精神私宅監禁の実況及びその統計的観察』で「我が国の十何万の精神病者は実にこの病をうけたるほかに、この国に生まれたる不幸を重ねたるものというべし」という有名な言葉を残し、これまで非人道的な座敷牢・民間の収容施設を合法化した「精神病者監護法」(1900年制定)を黙認していた明治政府を弾劾する書となった。

呉秀三らの私的監禁廃絶の運動は議会を動かし、精神病者の医療を国の責任で整備するための法律「精神病院法」が1919(大正9年)に制定された。精神監護は同時に廃止するのが当然であったが、第一次世界大戦勃発のため全国的に病院の設置費用もなく、先の監護法は存続させた状態となった。

呉秀三は松沢病院に移り欧州で学んだ「患者を人としてみる」病院運営にことのほか国の束縛から解放させることに努めた。事例として社会復帰のため病院の庭に患者たちの作業で「ため池づくり」をするなど他病院の

拘束率の九分の一の実績を創っていった。まさに100年前に呉秀三が日本の精神障害者にたいする拘束からの解放と健康福祉に挑んだドキュメンタリー映画であった

製作者の今井友樹監督は、「避けて通りそうな精神科医療史に取り組まれ153年前に生まれた呉秀三の実績を、呉に詳しい岡田康雄先生や橋本昭先生そして故秋元波留夫先生がまとめた資料から呉秀三の片鱗に触れ、インタビューを重ねながら人物像を作り上げるのに、追いつけて3年を要した。本作品をきっかけに『二重の不幸』を我がこととして、精神保健福祉従事者だけでなく、社会全体が現状を再認識する契機になれば幸いです、私も一人の人間として今後とも精神障害者の諸問題に向き合っていきたい」と講演された。



【今井氏プロフィール】
1979年岐阜県生まれ(現在38歳)。日本映画学校(現・日本映画大学)卒。2004年に民族文化映像研究所

に入所し、所長・姫田忠義に師事。2010年に同研究所を退社。2014年に劇場公開初作品・長編記録映画『鳥の道を越えて』を発表。2015年に株式会社「工房ギャレット」を設立。きょうされん40周年記念映画『夜明け前 呉秀三と無名の精神障害者の100年』監督。

映画「夜明け前」と今井監督の講演 アンケート結果

- 【参加者数】133名(家族会58名、家族会以外75名)
- 【アンケート提出数】78名(提出率:59%)
- 【年齢別】10・20歳代(11名)、30・40歳代(17名)、50・60歳代(32名)、70歳以上(16名)
- 【性別】男性(27名)、女性(46名)
- 【分野別】当事者(7名)、家族(30名)、福祉関係者(16名)、医療関係者(8名)、施設関係者(4名)、学生(6名)、教職員(3名)、その他(3名)
- 【映画へのご意見、感想等】(抜粋)
 - ・タイトルの「夜明け前」は、問題点が改善されていない現在に、ぴったりのタイトルであると思います。(70以上、男、家族)
 - ・呉秀三の調査の時代から100年もたっているのに、いまだに「座敷牢」が実際にあること、このことについて、社会が、国民一人ひとりが、厳しく、認識し、その問題解決にあたる必要がある。(50・60、女、福祉)
 - ・非常に分かりやすく、呉秀三氏についての知識のない者でも大変わかりやすかったです。(10・20、男、学生)
 - ・社会の迷惑にならないという治療のあり方はいまだ変わらないことが良くわかりました。(70以上、女、家族)
 - ・呉先生の説かれた「患者を人として見る」という原点を今の精神医療の現場に今一度再認識させる為に必要な映画だと強く感じました。(50・60、女、家族)
 - ・100年前に患者の拘束を無くす取組みがされていたが、なぜ今世紀において病院での隔離拘束が存在するのかがこれからの課題に感じた。(10・20、男、学生)
 - ・100年前と変わらない精神障害者に対する「我が国」の偏見、重く暗い。(50・60、女、家族・福祉)

当事者の思い

「ゆうゆう会だより」より

SA関西合同ミーティングに参加して

悠々会会長 福家有喜生
(平成30年10月号より)

9月16日(日)JR高槻駅横の交流センター8階で、1時30分から4時30分まで関西合同ミーティングがありました。

最初は、福井大学の橋本直子先生の基調講演がありました。

SA(「統合失調症無名の会」の略称。)の歴史や展開ということを言われました。今から18年前北海道のべてるの家でSAの集まりがあり現地へ行かれたそうです。

そんな中10年前大阪でもSAができ、OSAといい、話すことで病気が回復するなど、自分のことを話し、人の話を聞き、病気をよく知り、長くつづけていく事が回復にいいと言われました。

自分に出合うことで自分を発見出来る。例えば目の見えないような人にたとえれば、その人の希望で病気が回復する。

つぶれるSAは専門化したり、リーダーができたりで、もともとつながりがうすれる。

そんな中でセルフ・ヘルプ・グループの体験をわかちあう。安全を守る。新人を受け入れる。他のグループと交流すること。などを話されました。

患者さんの体験発表

Kさん 自殺未遂をしたが、自分が生きていく事は、神が何かをせよということ。

Iさん SAで心をハダカにして、話をする。と効果がある。自分は特別ではないとわかる。

奈良さん SAは大人の心のクリーニング心の成長がある。

高槻SAさん デイケアのリハビリが心の成

長になる。

奈良SAさん 病気の回復は、1、病状の回復―薬と体が良くなる。2、絶望(他人不信・自己不信)から本当の回復へ。3、仲間と一緒に回復―一人だけの回復ではない。仲間からの依存から自立へ向かっている。

Yさん SAはリーダーをもたないのでみんなが責任をもつのがいい。

当事者Aさん SAは心の大そうじ。

吉川さん 今を精一杯生きる。

1度目の休憩の後

「テーマトーク」といって3名のSAの実演がありました。

1. 司会者を決める。

2. 6つのステップをみんなで読む。

3. 話をする(たとえば今日のテーマの短所と長所など)。

4. 平安の祈りで終わる。

以上のことが行われました。

2度目の休憩の後

新阿武山病院の岡村先生が、病気は薬を飲むが、スポーツ(フットサル)で治す。

健康は、文化的な音楽や絵、スポーツはヨガやジョギングがいいと言われました。

他にNPOの人 SAは自分と向き合う。ひたすらミーティングをする。それをくりかえしくりかえしやる。そして自分を知る。

体験話をして自分の物語を作る。どこのSAグループも同じルール同じ原理でやっています。

SAの魅力は、ミーティング、自己や他人を見つめ社会的に見守ることです。(してはいけない事はしない)

最後に新阿武山病院の平野先生は、人類の知恵は2つあると言われました。

一つは科学的文明で伝え続けて発展する。

二つは自分の経験をつみかさねて行くので人類は発展するのだと言われました。

よかった。(50・60、男、当事者)

現状でも自宅に監禁するような事件が起こっており、まだまだ精神障がいについての啓発などがたりていないと感じました。(10・20、女、施設)

障害者は「お荷物」との意見、事故が続く中、この映画は画期的・意義あると思った。(70以上、男、家族)

形を変えているが、現代にも通じる監禁や監置があるということを感じ、考える機会になりました。(10・20、女、その他)

【講演へのご意見、感想等】(抜粋)

・精神医療の中で自宅監置に対する認識がうすれていく中で、今回の映画は刺激になりました。(50・60、男、医療)

・若い監督の新しい、柔軟な、視点がとても良かったです。(70以上、女、家族)

・「夜明け前」というタイトルを付けられた背景について知ることができて良かったです。素敵なタイトルだと思います。(10・20、女、当事者・学生)

・監督の個人的な思いを知れてよかった。(中略)これからも「声なき声」に陽をあてる良い作品をつくっていただきたいと願っています。(50・60、女、教)

・タイトルを「夜明け前」にされたお話同感でした。(50・60、女、福祉)

・何も知らないところから、この映画を作ったのはすごいと思った。(10・20、女、学生)

・かんどしました。(50・60、男、当事者)

・製作過程や監督の様々な思いを直接お話し頂けて、色々な角度から知ることが出来て良かったです。(50・60、福祉、教)

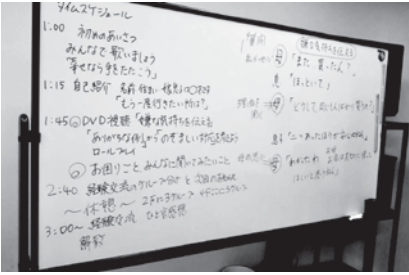
・呉先生は昔の人と違っていましたが、現代の日本に大切な必要な人であると最近の事件から思い知る。(70以上、女、家族)

家族会紹介

家族SST交流会を訪問して

堺市にある「家族SST交流会」を訪問しました。会場は南海電鉄高野線「堺東駅」近くの堺市総合福祉会館です。堺市内の方が多いのかと思いきや、近い遠い関係なく子どもの方々の参加が多いため、参加されている方も30名くらいが集まり、みんなで歌いましょうの声かけで「幸せなら手をたたこう」を全員で歌う。声も手拍子も足拍子も大きな音で、参加者のエネルギーの扉が開いた瞬間のように思いました。(ストレス発散の瞬間?)引き続き、順番に自己紹介があり、その中で「もう一度行きたい場所」を話す場面では、家族と発病前に行った思い出の地なのかなと思いつつながら聞いていました。

高森信子氏の「嫌な気持ちを伝える」のDVDを視聴、ロールプレイ(二人一組で)、また「お困り事は?何か聞いてみたい事は?」の声かけに各々の思いが話されると、「そうそう、そんなこともあったな」と共感したり、納得したりでした。休憩をはさんで、ひとりひとりが十分に話ができるように、4〜5人のグループに分かれて経験交流がスタート。皆さん鏡を脱ぎ、「こ



こはいいのよ、何を話してもいいのよ、楽にね」のスタッフの配慮が見られ、1時間もあっという間に過ぎました。最後に「ひと言感想」の用紙を集め、スタッフは「今日のふり返り」もされる。

参加者は話すことで、今日までの肩の荷を降ろせ、少し軽やかな気持ちで、また一日頑張れる、また来月まで頑張れるの思いで、家路につかれたことと思えました。

毎月のこの家族SST交流会の準備をされるスタッフの方々がよく勉強されていると感心しました。元気をもらい、私ももう少し頑張れるかなの気持ちになりました。



家族SST交流会が大切にしていること

当会は2009年に発足しました。同じ体験をしている家族同士がつながり、支えあい、語りあい、学びあって、回復する力をつけることをめざします。家族が元気になるために、対応のコツを学ぶセルフヘルプグループです。いつでも見学にお越しくください。

※SSTとはソーシャル・スキルズ・トレーニングの略。回復力を高めるコミュニケーションのコツ、接し方を学びます。相手の気持ちがあわかって、自分の気持ちも言えて、お互いにより良い人間関係になるための勉強です。

《活動内容》

- 例会：毎月第4日曜 コミュニケーション(SST)を学ぶ、情報と経験交流、お困りごと相談
- 会報(毎月発行・発行部数750部) 配布先：会員、医療機関、保健所、行政、各支援機関
- 講演会：高森信子氏、瀧本優子氏、支援機関の方々をお招きして毎年開催
- 相談活動：電話相談、個別対面相談(毎月第1金曜) 080-2517-6939 川辺まで

●「家族による家族学習会」を毎年実施

※「家族による家族学習会」とは2007年からコンボが家族や専門家と共に作り上げ、普及させてきた「家族による家族学習会(以下・学習会)」プログラムは2016年から、「みんなねっと」で実施しています。この学習会は、1コース5回を少数で行うプログラムです。テキスト「じょうずな対処、今日から明日へ」を輪読し、参加者同士の語り合いで会を進めます。家族SST交流会が手探りで始めた学習会も今年で8年目。今では当会の枠を越え、地元家族会とも協力し、今年度は大阪府内6か所(※)で開催しています。初めは不安な表情で参加された方が明るくなっている姿は、担当者の喜びでもあります。参加者の多くは、その後、各地の家族会に入会されています。

※大阪府内6カ所：さわか病院、阪本病院、吉村病院(今年度から実施)、堺市内1カ所、河内長野市内2カ所で開催。

(編集委員 角口 出水)

親亡き後に備える

大家連精神保健福祉講座(特別編)

『グループホームづくりの基礎』を開催

精神障害者を対象としたグループホームについて、家族会では実現したいという要望が強いようですが、大阪府内での実施事例が少ないこともあり、具体的な取組みにはなかなかつながりません。

今後、地域や家族会でグループホーム設置を検討する際の参考となればと考え、大家連講座の特別編「グループホームづくりの基礎」講座(全2回)を開催します。

今回は第1回として、「グループホームに関する制度、運営等について」学びました。

12月7日(金) 13:30~16:00、アネックスパル法円坂の会議室において開催し、講師は、社会福祉法人 ライフサポート協会の高橋爾氏はしちかと慶元裕樹氏けいもとひろきにお願いしました。

慶元氏は、グループホーム・ショートステイのサービスマネジメントをされていて、以下の内容について具体的に説明されました。
グループホームの定義

障害のある方に対して、主に夜間において、共同生活を営む住居で相談、入浴、排せつまたは食事の介護、その他の日常生活上の援助を行うサービス

グループホームの支援内容

(夜間の支援内容以外にも)

- ・ 調理、清掃、洗濯等の家事援助
- ・ 入浴、食事、排泄等の身体介護
- ・ 通院同行、薬の投薬、管理等
- ・ 休日の簡単な余暇支援
- ・ 受給者証更新手続き等の行政手続き関係

グループホームの建屋、職員配置

- ・ 入居定員…2人以上10人以下(大阪市基準)
- ・ 建物…一戸建て、マンション、公営住宅など
- ・ 利用制限…18歳以上(学校を卒業している)から
- ・ 配置職員…管理者、サービスマネジメント者、生活支援員、世話人、夜間支援員など

※生活支援員、夜間支援員の配置は必須ではありません。

そのほか、入居の前に体験利用の制度が有ること、ヘルパー利用については移動支援や行動援護は引き続き利用できること、日中の過ごし方の事例などについても説明されました。

グループホームにかかる費用、入居後の金銭管理、グループホームの運営等についてもお聞きしました。

高橋氏は、地域活動支援センターこちらの相談ネット・ふうがのセンター長をされていて、以下の内容について説明されました。

相談支援から見える生活支援の課題

- ・ 生活課題の複合・多問題化
- ・ 長期入院者の地域移行課題
- ・ グループホーム以外の資源開発や柔軟な制度運用

また、「グループホームでの生活を展望して」と題して、2事例について説明されました。その後、2人の講師に対し、会場から活発な質問が多数寄せられました。

2月7日には、2回目の「グループホームづくりの基礎」講座を開催します。

内容としては、①精神障害者を対象としたグループホームについて
4事例の紹介 ②当事者のグループホームへの意向調査結果 ③今後の進め方等を 計画しています。



平成30年度の賛助会費報告

年会費をいただきました。ありがとうございました。
賛助会費 (1口3千円/年)として

7人分		7口
-----	--	----

(寄附)

大家連へのご支援、大変ありがとうございました。

氏名	地域	金額
帝塚山椿館クリニック	住吉区	10,000円
大阪さやま病院	大阪狭山市	30,000円
やまうちクリニック	阿倍野区	10,000円
メンタルクリニックおかた	阿倍野区	30,000円
やまもとクリニック	西区	10,000円
湯原悦子	愛知県	5,000円
金岡中央病院	堺市	30,000円
キム診療所	東成区	10,000円
やなぎ会家族会	枚方市	10,000円

(平成30年8月17日～平成30年12月4日現在)

精神障害者を持つ方の

配偶者・パートナーの集い

家族会は親の立場の方が多いです。そのため、配偶者・兄弟姉妹と立場が違つと、話に入れないなどの意見も聞きます。

日時 奇数月の第2日曜日

午後1時半～3時半

場所 アネックスパル法円坂1階 大家連事務所
申込 不要(気軽に)参加ください

おしゃべりカフェへの参加

いろいろな人が気軽に集い、おしゃべりすることを第一としますが、精神福祉に関する制度や法律を自ら学び、考える力を育成することも目指しています。

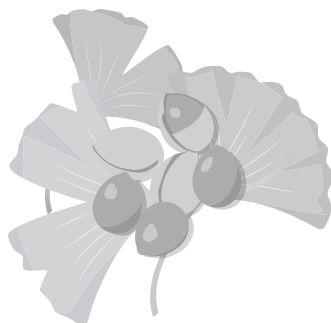
日時 偶数月の第2日曜日

午後1時半～4時

場所 アネックスパル法円坂1階 大家連事務所
申込 不要(気軽に)参加ください

林信子さんが知事表彰を受賞

堺のぞみの会の林信子さんが、11月12日、大阪府精神保健福祉功労者知事表彰を受賞されました。長年にわたる家族会活動、大家連活動ご苦労様でした。



編集後記

編集会議の日(12月4日)、法円坂の坂道と大阪城公園は、黄金色の銀杏の真つ盛りでした。

この「だいかれん誌」を発送するころには、すっかり落ち葉になっていてのことでしょう。

11月26・27日と、「みんなねつと兵庫大会」が開催されました。

大阪府からも多数の参加があり、兵家連によると、全国から、両日で延べ2500人の参加があったそうです。

「家族の思い」と「PSWの基礎知識」は、次号には掲載する予定です。

家族や当事者の投稿も歓迎します。

(編集委員 倉町公之)

平成30年度の共同募金配分金57万円が決定しましたのでお知らせします。
共同募金の寄付による配分金でだいかれん誌の発行が成り立っています。
寄付下さった皆さまに心よりのお礼申し上げます。
又、会員の皆さまには赤い羽根共同募金へのご協力をお願いします



編集人 公益社団法人大阪府精神障害者家族会連合会 会長 倉町 公之
連絡先 〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35 アネックスパル法円坂(A棟1階)
Tel 06-6941-5797 Fax 06-6945-6135
ホームページ daikaren.org だいかれん で検索もできます

振込先 郵便振替 00970-4-72221 公益社団法人大阪府精神障害者家族会連合会

定価 1部100円(大家連家族会費には購読料を含む)

発行人 関西障害者定期刊行物協会
大阪市天王寺区真田山町2-2 東興ビル4階